

グスクの縄張りについて（下）

當 真 神 一

(沖縄県立博物館)

On the Ground Plan of the Gusuku, the Medieval Castles, in
the Ryukyu Islands (2)

Siichi TOMA

(Okinawa Prefectural Museum)

ヒラキ山遺跡（龍郷町戸口）

この遺跡は龍郷町の東南端戸口にあるグスク跡である。戸口の集落は200~300mを越す山並みを背後に、前には良港となる小湾を擁し太平洋に面している。東に大美川、南から西に戸口川が流入し、その川沿いには広い水田が広がっていて村落立地の上で恵まれた村である。

グスクは、中戸口の背後にあり、大美川と戸口川とに挟まれた南北に長い微高地の先端部を利用してつくられている。1773年の『平家没落由来書』には、平行盛の居城であること、城の規模、行盛本城を守るためにまわりに松當城などの支城が築かれていたこと、さらに、遠見番として安木屋場や屋仁崎に今井権大夫、蒲生左衛門等を召し置いたことなどが記述されている。この文書は、17世紀に記述されたものでそのまま史実とするわけにはいかないが、戸口の旧家等に長く伝承されていたということに大きな意味があるようと思われる。

グスクは周辺の平地部との比高が23mあり、城内からは戸口の集落や農耕地が一望のもとに見わたせる。このグスクの西には戸口川を挟んで標高114mのコミグスク、西の足下にはグスクと称される標高13m程の小高い丘がある。コミグスクは、ナガネと呼ばれる山並の北端にあたる山頂のことである。隣接したオデと呼ばれるピーク部との間には幅2m、深さ3~4mの堀切があるといわれる。このコミグスクは、『平家没落由来書』にヒラキ山の支城としてみえる松當城に比定できるグスク跡である。グスクと称される丘は、

中戸口の裏側（北）にあり、平地部との比高差が10mある。この丘はターチヂと呼ばれる山並みからつづく尾根の先端部にあたる。後方の尾根との間は堀切によって区切られ独立した丘になっている。古戦場跡といい伝えられており、かつてはヒラキ山と関係の深い、⁽³⁾ グスクだった可能性がある。

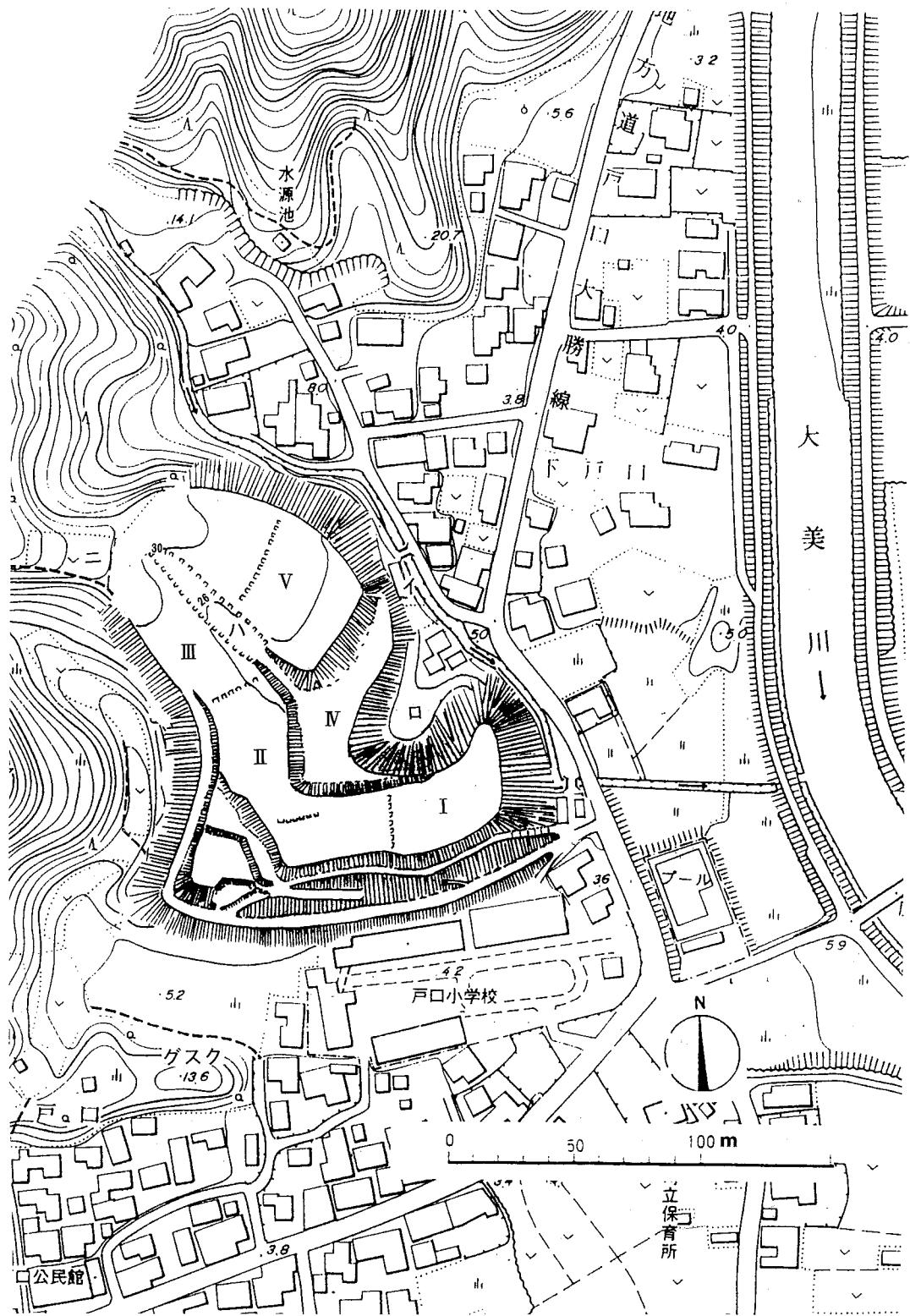
城内は北西から南東方向に一本の浅い堀切が入り曲輪群が東西に二分された形になっている。西側の曲輪群はさらに先端部が東側に屈曲して突出し、下戸口の集落から大美川の北を眼下に望むような位置にある。東側の先端部に置かれた曲輪Ⅰは、東西約40m、南北約30mの規模をもつ、グスク内でも最もきちんとした曲輪の形態を有し、かつ三方が鋭い切岸によって囲まれていることから主郭だと思われる。曲輪Ⅰの南側と西側に腰曲輪がそれぞれ二つづつ取りついている。南側の腰曲輪は、幅の細い帯状になった腰曲輪で上下二段になっている。南からの侵入に備えて築かれたものであろう。曲輪内は、現在、アスレチック用の遊具が置かれ子供たちの遊び場になっている。また、曲輪の東側には階段状になった外部からの出入り口が取りつけられている。西側の腰曲輪は、やや規模の大きいもので、やはり上下二段になっている。西側がかなり緩い斜面になっていることから、それへの備えてとして築かれたと思われるが、曲輪を矩形にもっていくなど、かなり神経をつかった内容の腰曲輪になっている。

虎口は、下戸口に向かって開いたU字状の谷部口に設けられていたと推定されるが、現在、その推定位置には雑木が生い茂り調査を困難している。そのため虎口の形態については明らかでない。イ付近を地元で「マエサク」と呼んでいる。「ヒラキ山に平家の城があったころ城への上り口があった所」としての伝承が残っている。⁽⁴⁾

ハは堀切状になった窪みで、この窪みによって城内が二分される形となる。この窪みの南側に口の谷部が開いており、虎口からの引き込み的な空間になっている。虎口から入ってくる者は、必ずこの窪みを通過しなければならず、その際、上部の曲輪群からは見通しがきき、迎撃が可能である。

曲輪群を西側の方から順にみていくと、まず西側にⅡとⅢの曲輪が尾根上に連なり、東側にⅣとⅤの曲輪が展開する。規模的には東側の曲輪が大きい。現在いずれも畠になっている。ⅢとⅤの曲輪の北側は、ターバチと呼ばれる山並みの尾根部にあたるところで、この方面に対しては堀切を設けて防御を固めている。現在この付近は農地整備等によって改変を受け、堀切だったことが気付きにくくなっている。しかし、地形をよく観察するとわずかに堀切の痕跡をくびれ部に確認することができる。

このヒラキ山は、切岸の斜度が急で、城内の各曲輪群も段差がついていて複雑に構成されている。さらに南には、コミグスクを支城として配置するなど、明確な防御意図をもって築城されたことが想定できる。すぐ近くに良港となる小湾を控えていることもヒラキ山



が城であることの性格を際立たしている。

昭和44年12月11日から16日までの6日間、熊本大学の松本雅明教授らによって試掘調査が行われた。それによると、13世紀の半ばすぎと、15世紀の中期ちかくの二度にわたって火災にみまわれていたことが報告されている。さらに、わずか3坪余の小面積の発掘で、南宋から明初にいたる貿易陶磁600余の破片を発掘し、この城が海外貿易によって栄えていたことを立証した。⁽⁵⁾

以上、奄美大島に分布するグスクのうち赤木名グスク、浦上グスク、伊津部勝グスク、ヒラキ山の4つのグスクについて述べてきた。奄美大島にはその他にも数多くのグスクがあり、沖縄のグスクとは違う構造や形態をとっている。しかし、ここでは個々のグスクについて網羅的に記述することを避け、各地域に分布するグスクを数ヵ所づつ取り上げてこれを資料化することによりグスクの実態に迫るべく、そのための基礎作業として縄張図を作成し、縄張りからみたグスクの機能や性格を考えていくこととする。

繰り返すようであるが、本稿の意図するところは、これまでのグスク研究で全く振り見られなかった縄張り研究を通して、その重要性を訴えつつ今後のグスク研究の方向性を見出していくこうとするところにある。

では、これまで述べてきたグスクの縄張などを検討しながらその構造や内容および性格等について考えて見ることにしよう。

前述した四箇所のグスクに共通していえることは次の7点である。

- ①沖縄のグスクに多く見られる石垣や石塁が認められない。
- ②堀切や切岸によって、それなりに独立したグスクとしてとらえられる。
- ③集落の裏山に位置し、村によって城が造られたといったイメージである。
- ④比較的広い農耕地を擁する集落に1セットで存在し、その集落や農耕地が展望のきく所にある。
- ⑤近くに小湾や川を控えている。
- ⑥グスク内から貿易陶磁器が採集される。
- ⑦神聖化された山になっているのが多い。中には神社の敷地になっているものもある。

まず、①と②であるが、たしかに奄美大島のグスクには、沖縄の石灰岩地帯で広く見られる野面積みの城壁（野面積みの石垣がわずかに認められるグスクもある。しかし、これらの石垣は城壁と呼べるようなものではなく、曲輪内を仕切るための粗雑な石積みか、あるいは、敵への投石用として準備された石積みの類である。）や切石積みの高い城壁を有するグスクはない。石垣に代わるものとして山の斜面を削ってつくった切岸、峰づづきを遮断する目的の堀切、あるいは土を盛って防御壁とする土塁等が発達している。そのことから考えると、奄美大島のグスクは、日本の中世城館が切岸や堀切、あるいは土塁などの

組合せによってできていることと一致し、石垣を主体とする沖縄のグスクとは若干様相を異にしていることがわかる。

②から⑦については、奄美大島におけるグスクの内容などを考える上で非常に重要な特徴点であり、各グスクの構造や規模を検討しながらもう少し突っ込んで考えてみることにしよう。

前述の四つのグスクは、いずれも舌状に張り出した山の先端部を利用したものである。峰つづきを堀切で遮断し、孤立した山のピーク部を主郭にする。その主郭を中心に離段状に造られたいくつかの小曲輪群によって構成されている。浦上グスクや伊津部勝グスクは、小曲輪群が最も単純に構成されたもので、規模も小さい。その点、赤木名グスクの場合には、尾根筋沿いにいくつかの小曲輪群を配置するとともに、主郭の下に腰曲輪、さらに、谷沿いから上がってくる侵入者に対して堅堀を設けるなど、2つのグスクに比べ複雑な構造をもち、技巧性に富むと同時に山のピーク部を複数取り込む形で築城されていて規模も大きい。

一方、ヒラキ山の場合は尾根筋のくびれ部に堀切を設け後方の山との独立性を保つことでは、浦上グスクや伊津部勝グスクと類似するが、城内の曲輪群は規模が大きく、平地との比高差も高く、防御上のまとまりもしっかりしている。

このように、奄美的グスクも中世城館と同じ形態をとっているものの曲輪の構造や城域の規模などの点でそれぞれ差異があり一様ではない。これらのことを見ながら考えると、グスクは城であることには違いないが、機能や性格の異なるいろいろなグスクがあったのではないかと考えられるのである。

浦上グスクは、南島落ちをした平家の平有盛が大島の北部経営のために築いたという伝承がある。グスクは、浦上川の氾濫原を見下ろす舌状台地の先端部に立地する。

グスク内には有盛神社があり、神社の鳥居をくぐって境内に入っていくと、城内で一番広い曲輪に到る。現在、この曲輪の左端にはトタン葺きの拝殿が建っている。この曲輪から、山のピーク部に向かって一段一段離段状に高くなっている最終的に6つの小曲輪が形成されている。ひとつひとつの曲輪の規模は約7m×6m程の小さな面積である。

ピーク部は標高43mを測り、面積約70m²程の防御された削平地（ここには、現在、奄美代官肥後翁助が1816年に建立した平有盛の墓碑があり、その脇には1817年藩役人が寄進した石燈籠等が建っている。したがって、これらの墓碑や石燈籠はもともとグスクとは関係がない）になっている。さて、このピーク部の後方（東側）は切岸になって一段下がり、この低くなったところに堀切が掘られている。堀切は三本切られており、三本の中では真中の堀切が一番保存良好で、現状では幅5m、深さ4mを測る。このピーク部の削平地（小曲輪）からは、城内の各曲輪の様子や、後方堀切部の様子が手にとるように見え

る。城内への虎口は、おそらく現在の神社入口と重なり、鳥居が建っている付近を想定することができる。古くは浦上の集落がこの虎口の西側前方に展開していたようである。城内の各曲輪群に取りつく虎口は、すべて曲輪下方南側縁部に取りついていて、虎口から侵入してくる敵兵に対して曲輪内から側面攻撃が加えられるようになっている。

グスクと浦上集落との位置をみると、両者は至近距離にあって、集落のすぐ裏の山がグスクといった関係である。このような立地のグスクは、イザというとき、村人が避難する場所としては好都合であり、攻撃より、防禦、避難に適した構造・規模となっている。

さらに、このグスクの構造をみると、もし、侵入者が城内に入り込んできたとき、城内に避難した人々は堀切をこえて尾根づたいにグスク後方の高い山へと逃げ、敵兵が去れば、また、山を下りてグスクに入るといった状況の想定が可能である。したがって、浦上グスクは、領内の有力者が先になって築いた城ではあったが、彼らの領域支配の拠点のためというより、有事の際、領内の有力者をはじめ、領内の人々の生命や財産を保障するための避難の城であり、「村の城」というイメージで捉えることができるのではないだろうか。伊津部勝グスクの場合も、この浦上グスク同様、細尾根をいくつか掘り切っただけの、小規模グスクで、②と③の特徴を有していることから、「村の城」のイメージで捉えられる城であるが、繩張りをもう少し詳しく見ていくことにしよう。⁽⁶⁾

伊津部勝グスクは名瀬市の東海岸に川口をもつ大川流域の沖積平野に面した台地の先端部に築かれたグスクである。集落からまっすぐのびた道の延長線上に一枚の主郭を配置し、その後方の尾根に二本の堀切を掘っただけの単純なグスクである。主郭の面積は 697 m^2 ($17 \times 41\text{ m}$)、南と北側には比高約4mの切岸、南側尾根続きのところには、幅2mの土壘と幅5mの堀切を掘って主郭の守りを固めている。虎口は、西の平野部に面し、そこから一本の道によって集落に連結されている。虎口は矩形になり、一応侵入者に対しては防禦を固めているようであるが、集落から登るとすぐ虎口にぶつかる構造を取っている。繩張りも南北一直線のものである。このように単純で小規模の内容である伊津部勝グスクは、多くの点で浦上グスクに類似性を見出すことができる。したがって、この伊津部勝グスクもまた、領内の有力者と村落民の協力によって生み出された「村の城」なのである。

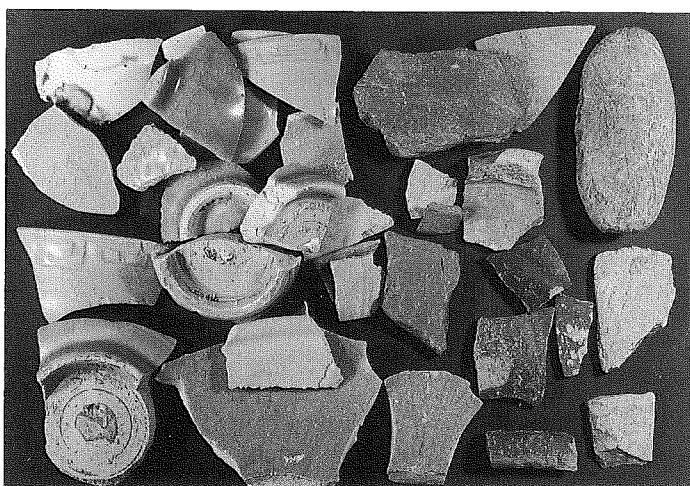
さて、次に述べる赤木名グスクやヒラキ山などはどうであろうか。先の浦上グスクや伊津部勝グスクと比べて見ると、グスクの規模が大きくやや複雑な構造をとっていることなど全体的な繩張りやグスクの規模等についていろいろと違いがある。その他グスクを生み出した村落環境についても大きな違いを認めることができる。たとえば、村落の規模が大きいこと、領内の農耕地が広いこと、また、近くに良港となる海岸入江を控えているといったこと等、地理的な立地条件も含め浦上グスクや伊津部勝グスクといろいろな相違点があることがわかるのである。

赤木名グスクは、比高100m前後の丘陵上に占地したグスクで、尾根上に削平段を連ね、その下方には腰曲輪を配置するなどしてなかなか複雑な曲輪群によって構成されている。土塁や堀切等未発達の部分もあるが、構造としては浦上グスク、伊津部勝グスクよりはるかに優れていると見なければならない。

ヒラキ山は、龍郷町戸口川の段丘面にあり、北から南にのびた台地がさらにが東に曲がっている舌状台地の先端部に占地したグスクである。曲がって細くなったところには堀切を掘り、先端部だけを独立させて築かれたグスクである。グスクの規模は、東西の最大幅約135m、最少幅約80m、南北は西側が150m、東側が100mを測る。平地部との比高は20～30mで、グスクの南に戸口川、東側に大美川が流れ、両川の沿岸には広い水田地帯が広がっている。縄張り構造の特徴をみると、先の赤木名グスクより比較的に単純な構造をとっているものの、各曲輪の面積がほぼ一定しておりかつ比較的広いスペースが確保されている。

さて、この二つのグスクとも近くの平地には比較的大きな村落を控えており、これらの村落とセットになって存在していたことがわかる。もちろんグスク時代の村落が現在と全く同じところに同じ規模で相似的に存在していたわけではないが、両村落が比較的古くからの村落であることから考えるとグスク時代にもその状況は現在とあまりかわらなかつたのであろう。

グスクの構造はその築城主体者のおかれている政治的、経済的、社会的な諸条件によって決定されるのであるから、個々のグスクの形態はその当時の歴史的状況に対応していたとみられる。そのような観点から見ると、赤木名グスクやヒラキ山の場合は、前述した浦上グスクや伊津部勝グスクと違って、より大きい村落を含む広い範囲を単位とする拠点的な領域支配のためのグスクであった可能性がある。



ヒラキ山採集の遺物

グスクを擁する赤木名や戸口の集落は、地形的にも奄美大島では珍しく広い平野部が開けたところであり、近くには風の影響も受けにくい波静かで天然の良港となる小湾や内陸部との連絡路となる川を控えている。これらの地形的条件に恵まれたためか、この二つの村落は古くから発達した地域であった。そうした村落を基礎に成長した地域的支配者がいたからこそ赤木名グスクやヒラキ山のような複雑な構造をもち規模の大きいグスクが築城されたのであろう。

このように各地のグスクに拠って地域的支配をおこなっていた有力者を沖縄では按司または世の主といい、奄美大島ではアジ、ヒャー、グラルなどとよばれていたらしい。

このように各地のグスクを拠点に地域的支配をおこなっていた按司（アジ、ヒャー、グラル等も含む）の歴史的性格について三木靖氏は、「日本列島に10世紀にみられる成長期の在地領主の一類型と位置づけられるべき」だという認識をしめしている。たしかに、三木氏がいうように、南西諸島の歴史をみると(7)場合に後進性のみが強調され、グスク時代の地域的支配者であった按司たちの歴史的性格については正当な位置づけがなされてこなったように思われる。そのために按司たちが拠ったグスクについても在地領主制に不可欠であった城郭だという認識をもたぬまま今日のグスク論争をむかえ、現在、それが一人歩きしている感さえするのである。南西諸島に広く分布するグスクの歴史的意義を考えいく時、どうしても避けて通ることのできないのが在地領主制の性格の考察であろう。その点、中世の奄美（沖縄でいうグスク時代のころ）を「在地領主制の展開として理解することができる」と考える三木氏の意見に賛同したい。

三木氏の考える奄美の中世についてもう少し立ち入って見ることにしよう。氏は、奄美の中世を在地領主制の成生、発展、展開として捉え、その過程を「按司世」と「那覇世」、琉球王家の領国化に分析し検討をおこなっている。奄美での在地領主制が成立する時期については、消極的発言ながら11世紀前後を想定する。さらに出自については、根本的に生産力の発展に依拠しつつ共同体の分解の中から登場したと述べる。その他、沖縄や本土からの渡来者の中から在地領主になる例もあったことを地域の伝承や遺跡をしめしつつ論証している。そして13世紀までの奄美は、在地領主制の成立時期であり、14世紀以後は琉球王国の領国化として進展し、中世の後半すなわち15世紀以降は領国制に編成されたと考えた。したがって、奄美の中世が全期間琉球の支配下にあったとすることに警鐘を鳴らしつつ、奄美のグスクについては、「沖縄の勢力圏、文化圏にありながらこの地の中世前期までの伝統と、独特的地理的な状況基盤に発展してきたもの」と結論するのである。

三木氏の論文は、『奄美文化誌－南島の歴史と民俗－』所収の「奄美の歴史」（中世）に掲載された論考であるが、奄美のグスクやその築城主体者の問題をはじめて歴史的に検討した論文として高く評価したい。

根謝銘グスク（大宜味村字謝名城）

根謝銘グスクは、大宜味村字謝名城の東に聳える山の上に築かれている。グスクの北には、水量豊富な屋嘉比川（田嘉里川）が国頭脊梁山系の上流から西に貫流し東支那海に注いでいる。かつてこの川の両側には、水田が展開しており、それを取り巻くように小さい村落が点在していた（かつての水田は現在キビ畑にかわっている）。また、屋嘉比川の河口にはかつてヤファインナト（屋嘉比港）と呼ばれる港があって、沖縄周辺をはじめ遠く奄美大島諸島との交易船が出入りしていたとのことである。⁽⁹⁾

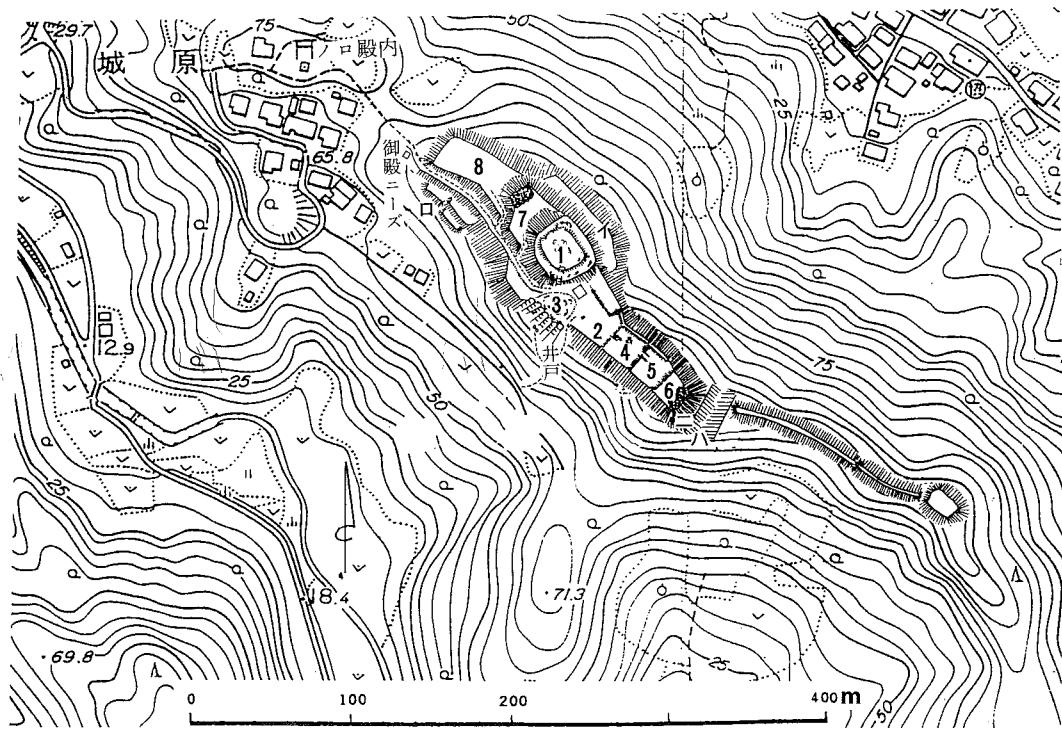
水田地帯と河川、その周辺に点在する小集落、さらに良港となる小湾を控えるといった地理的環境は、グスクが立地する上で好条件であり、根謝銘グスクはまさに地の利を得たグスクであった。

グスクが占地する山は、標高122mを測り、山麓の小字城との比高差が約50m、北側に展開する水田地帯との比高差は百十数メートルもある。

このグスクは、尾根の上に削平段を連ねその中に三つのピーク部を取り込んで築かれている。主郭の曲輪1がある北側のピークは、標高115mで、周辺に腰曲輪を配し30m×20mの規模をもつ曲輪である。曲輪内の東端に琉球石灰岩の露頭部があり、現在香炉が置かれ拝所として信仰の対象になっている。『国頭村史』では、『琉球国由来記』にてている「小城嶽、神名大ツカサナヌシ」に比定している。地元の人たちはウウグシク（大城）と呼んでいるが、曲輪全域をそういうのか、それともこの石灰岩が露頭する拝所のみをいうのかはっきりしない。この拝所は現在でも謝名城地区の大城門中によって祀られているといふ。

⁽¹¹⁾ ところで曲輪1は、周辺の各段に腰曲輪を付属させ、背後には鋭い切岸と断崖を控えるなど他の曲輪に比べ防御が厳重になり主郭としての体裁が整っている。曲輪内に琉球石灰岩の大岩が自然のままに残され外側から中の様子が見えないようになっているのも防御上の工夫からである。主郭は、グスクが攻められたときの最期の場として最も重要な曲輪であり、それなりに防御を固め、城主やその一族が自分たちの居所を構える空間として使用されたところである。

では、この曲輪1の中に御嶽があるのは何故だろうか。それは、沖縄社会がグスク時代をむかえて各地に按司と呼ばれる在地領主が出現して貿易の利権や支配領域の拡大をめぐって合い争う緊張した社会の動きの中で、按司たちの自己の勝利と村落の安寧を願う目的でもって、守護神を祀る御嶽がグスク内につくられ信仰されたからである。グスクに拠って小さな天下を支配した按司たちは、それなりの国家を夢みてグスク内に守護神を祀り崇拝していたことは、今帰仁城の城主攀安知が尚巴志軍の攻撃で破れたときに「城を守れ



根謝銘ヶ城縄張図

ない神には用がない」として一刀のもとに守護神の大岩を切り捨てたという伝承などからもうかがうことができる。

現在、各地のグスクの中に存在している御嶽は、このような経緯を経てつくり出され、廃城になってからは沖縄のグスクが「村の城」という性格を有していたこともある。後世村落民の信仰する御嶽として変質していったものと思われる。

さて、現在、この曲輪1の東南隅には後世つくられたと思われる石の階段が上下二箇所に取りついていて御嶽への出入り口として利用されている。おそらく、ここが主郭の虎口であろう。虎口を出て右に折れると城外へ抜ける城道、左を折れるとすぐ曲輪2である。

曲輪2は比較的大きい曲輪で、その中に神アシャギと呼ばれる6間四方（東西630cm×南北560cm）の壁のないセメント瓦葺きの建物が建っている。この建物の前庭部では旧盆後初亥の日に神女たちによって祭儀がとり行われているとのことである。また、この前庭部の北に隣接して腰曲輪イがあり、この下に鋭い切岸が設けられ城内への侵入を阻んでいる。南南西の隅には火の神を祀る小祠がある。この小祠の南に隣接して崖下の城外に通じる小道があり、現在はコンクリートの急な階段が取りつきグスクの麓まで下りて行けるようになっている。この階段の途中の崖下に二つの井戸跡が並んで存在するが土砂の流入によって完全に埋まり、現状ではわずかな縫みと線香が供えられていることで、かろうじて井戸跡だとわかるのである。

曲輪 3 は、全面石灰岩によって被われた 20m × 10m 規模の小さい曲輪で、南側は鋭い断崖に面し、北と東側は低い段差によって曲輪 2 に接している。曲輪 2 との比高差が現状では約 1.5m を測るが、古くはもっと高かったのであろう。地元の人はこの曲輪のことを中心城と呼んでいる。現在は御嶽として聖域になっているが、もとはグスクの防御にとって重要な曲輪だったと思われる。その理由としては、この曲輪の南縁が崖側に向かって僅かに突出していることでグスクの南斜面に視野が広がり、この方面から侵入してくるものにすばやく対処できること。曲輪の南下には前述したように井戸があり、その井戸を監視するのに都合がよいこと、さらに主郭の正面に向かいあって隣接することで主郭側の虎口を警戒するのに都合がよいこと等があげられる。曲輪内に櫓を設ければ、城下の謝名城や喜如嘉、さらに海上までも展望できるので遠くにいる敵襲にも備えることができる。このように、現在は御嶽になっていても、縄張りの構造を考えることでグスク内の一ひとつずつの曲輪が軍事上いかに重要な役割をになって造られていたかということを私たちは知ることができるのである。

さて、曲輪 2 の南東側は次第に高くなっていくが、そこには曲輪 4 が構築されている。この曲輪の北よりに琉球石灰岩で囲まれた直径約 1m の円形形状をした井戸跡といわれる窪みがあり現在拝所になっている。筆者が踏査した日には、前日までの雨のせいか 7 分ほどの水を湛えていた。グスクが立地する山の高いところでは水の確保が難しいという理由か



曲輪 4 の井戸跡といわれる遺構

らグスクは城ではないんだと考える人もいるが、実際、水量は少ないけれども地形・地質の構造によって高い所でも湧水がある場合もあり、この種の遺構について現在は枯れ井戸であったとしても、当時、溜井や井戸であった可能性は十分考えられる。⁽¹⁴⁾

この曲輪の東端には比較的しっかりした土塁が廻されている。水場を守るために警戒したことであろう。曲輪の西端にも東端同様土塁があるはずだが、そこは足を踏み入れることができないほどのブッシュに覆われているため確認することはできない。

さらに一段高くなって曲輪5がある。曲輪4との比高差は70~80cmを測る。この曲輪の東端にも土塁があるが、井戸曲輪4の土塁に比べると現状では幅が狭く、貧弱なうえに土塁の線も明瞭ではない。曲輪の正面に虎口らしい痕跡を確認することができるが、ブッシュに覆われているために精査ができず、即断はできない。

曲輪5より2m程高くなつて曲輪6が連続する。曲輪6は、自然地形の登りの瘦尾根をそのまま曲輪に活用している。この曲輪の南東側123mのピーカ部には人頭大の琉球石灰岩塊を雜然と積み上げた櫓台状の高まりが存在する。この櫓台状の高まりの背後は鋭い切岸となって北東から南側の方向に傾斜し、そこには、上端の幅が約10m、底幅が約6mを測る大きい箱形堀切が入っている。この堀切は、堀底から上の曲輪6までの高さが約9mもあり、東南東支尾根を攻め上ってきた敵が、曲輪6に取り付くのを阻止するには十分な防御施設であるといえる。

ところで、曲輪6の南東側先端部にある櫓台状の施設はどういうものであろうか。主郭の下に連なる曲輪7の先端部でも、また、次項で述べる親川グスクの中にもこの種の施設が見られるので少し検討を加えることにしよう。

まず、櫓台状を構成する石であるが、それは、前述したように拳大から人頭大の琉球石灰岩塊で、手で持つて投げたり、斜面を転ばしたりするのには手ごろである。また、積み方を見ても、石面がバラバラで隣の石と石の控えもかみあわず積石としては全くお粗末だといわざるを得ない。このように、場所を特定し、武器にも転用できる石がこういう形で存在することについて筆者は、投げるのに手ごろな石灰岩塊を、普段は曲輪の先端部に積んで置いて、一旦ことあるときには投石用の武器として用いたのではないだろうかということを考えている。

堀切を渡って下方から登つて来る敵に真上から石を投げて撃退する。当時の戦いの状況のなかでこのような戦術が取られた可能性は十分考えられることである。沖縄の古代歌謡集である『おもろさうし』の中には、刀・弓矢・槍・鎧等、武器や武具のことがよく謡われている。また、グスクの発掘調査では、鉄鏃や骨鏃あるいは鎧の金具類等が数多く出土する。グスクに拠った按司たちが、お互いに兵力を動員して争つたことは、グスクの繩張りを見ればすぐ理解できることであるが、実際の戦闘にあたつては、刀や槍、弓矢だけで

なく、投石や竹ヤリなどの武器も数多く用いられていたと思われる所以である。

堀切への南側は、尾根続きになっているが尾根の両側を削り落として幅を小さくし、2～3人の人間が同時に通れないようにしてある。この細い尾根をしばらくいくと標高113mのピーク部に達する。このピーク部の四方は切岸になり、防御された削平地として認識できる。規模は4m×3mである。これから南へは自然地形の下りの瘦尾根となっており城外と判断できるので、このピーク部をもって城域の南端と考えることが可能である。

主郭である曲輪1の北西側には一段下がった曲輪7の削平地がある。この曲輪は、15m×10mの小規模のもので、北西側の先端部には、曲輪6の先端部にあったような琉球石灰岩塊でできた櫓台状の高まりがある。この高まりの上からは、屋嘉比川と田嘉里の村落を眼下に、北西側をちょっとといったところに屋嘉比川河口部や浜の集落など、グスクの北側地域を一望のもとに展望することができる。

盛られている石灰岩塊は、曲輪6の先端部にあったものと状況が似ており、前に述べたような使われ方をした遺構であろう。

この下は急激な断崖となり次の曲輪8へと続く。この断崖面はブッシュがひどくて状況が擋めず、切岸になっているのか、自然のままであるのか判然としない。曲輪8は、40m×25m規模の細長い削平地である。この曲輪は、グスクへ上の道に向かって舌状に張り出すため、城への道を抑えるのには好都合である。

さて、曲輪2から虎口を出て北西方向に下って行くと2～3人がやっと通れるような大手ルートが曲輪7と8の中復を縫うように開いている。この狭い道をさらに下っていくと御殿ニーズやノロ殿内と呼ばれる旧村落と関係の深い広場や屋敷地に出ることになる。逆に集落から城内に入るには、曲輪8と7を左手にしながら狭い坂道を上っていく恰好となるので、この道に対して曲輪内から常に側面攻撃が加えられるようになっている。そういうことで、曲輪8もグスクの城域として捉えることができる。

城への道すなわち大手ルートは、曲輪7や曲輪8からの側面攻撃を受けるだけでなく、狭いうえに勾配がきつく、曲がりくねっている。さらにこの大手ルートの西下には、段状の小曲輪群が麓の城集落に向かって構築され、集落に通じる西側のゆるい斜面に対しても警戒を怠っていない。

このグスクは、規模の大きさと縄張りの構造からみて、かつてこのあたりに存在していた数箇所の村落を拠点に築城された城郭であることがわかる。このグスクを築いた按司は、現在の喜如嘉や謝名城の集落と屋嘉比川一帯に広がる豊かな水田をバックに勢力を拡張していった在地領主であった可能性が高い。『国頭村史』では、その城主は国頭按司だとされているが、伝承では英祖王の子孫大宜見按司の居城ともいわれていてはっきりしない。文献のない時代のことでもあり、築城主体者を特定することはなかなか難しいことである。

深度	ピット名 遺物								口
		A	B	C	D	E	F	イ	
0	土器片	11	8	6	4	2	3	5	20
	磁器片	39	38	23	26	8	14	6	14
	鉄片	1	0	1	1	0	0	0	0
	骨片	0	0	0	0	0	0	3	10
	貝殻	0	0	0	0	0	0	2	3
	その他	25	10	4	8	3	2	6	2
20	土器片	24	12	1	4	0	地盤	4	12
	磁器片	6	5	11	10	21		8	5
	鉄片	0	0	0	2	0		0	0
	骨片	13	4	0	1	2		3	3
	貝殻	1	0	0	0	0		0	0
	その他	2	3	3	2	3		0	0
40	土器片	16	31	13	岩石	岩石	岩石	岩	岩
	磁器片	1	2	10				岩	岩
	鉄片	0	0	1				石	石
	骨片	2	2	1				石	石
	貝殻	1	0	0				石	石
	その他	0	2	0				石	石

第1表 根謝銘グスク出土遺物一覧表
 (『根謝銘城調査概報』『琉大史学』第2号より)

あるが、ただいえることは、これだけのグスク普請をたった一人の人が一代でなし遂げたとは考えられないので、複数の按司が関与しながら改修を繰り返しつつ城としての変遷を辿っていったことが考えられる。では、時代的にはいつごろであろうか。考古資料によつて大まかな年代をつかむことにしよう。

1964年（昭和39）に宮城長信氏によって曲輪2を中心とする一帯で試掘調査が実施されたことがある。この時に発掘された遺物の出土状況は第1表のとおりであった。出土した貿易陶磁の年代を検討すると、13世紀から15世紀に属するものである。最下層から出土した陶磁器は13世紀に属し、上層の第I層からは、14～15世紀のものが多く出土している。そのことから、曲輪2の最下層の時期、つまりこの曲輪の最も古く遡れる時代がほぼ13世紀ごろで、最も新しい時代が15世紀ごろということになる。したがって、この根謝銘グスクは、三山分立の時代から琉球王国の形成期を経て、第1尚氏による琉球王国の統一の時期まで実際に存続し、機能していたことがわかるのである。

親川グスク（名護市親川）

親川グスクは、旧羽地間切の振慶名、田井等、親川、それに羽地内海に面する仲尾、仲尾次の各村落にかけて広がる標高40～50mの低い丘陵地帯のほぼ中心部に位置し、これらの各村落を領域支配するための拠点的なグスクであった。

伝承によるとこのグスクは羽地按司が築いたとされるが、グスク普請が途中で中止になり今帰仁城に移ってしまったため実際には城として使われることがなかったといわれている。このような伝承等を考慮に入れて、新城徳祐氏は、後に今帰仁城主になった柏尼芝によって築かれたグスクだとみている。⁽¹⁷⁾ ともあれ、文献がないのでグスクの来歴等については今のところ不明というほかはない。⁽¹⁸⁾

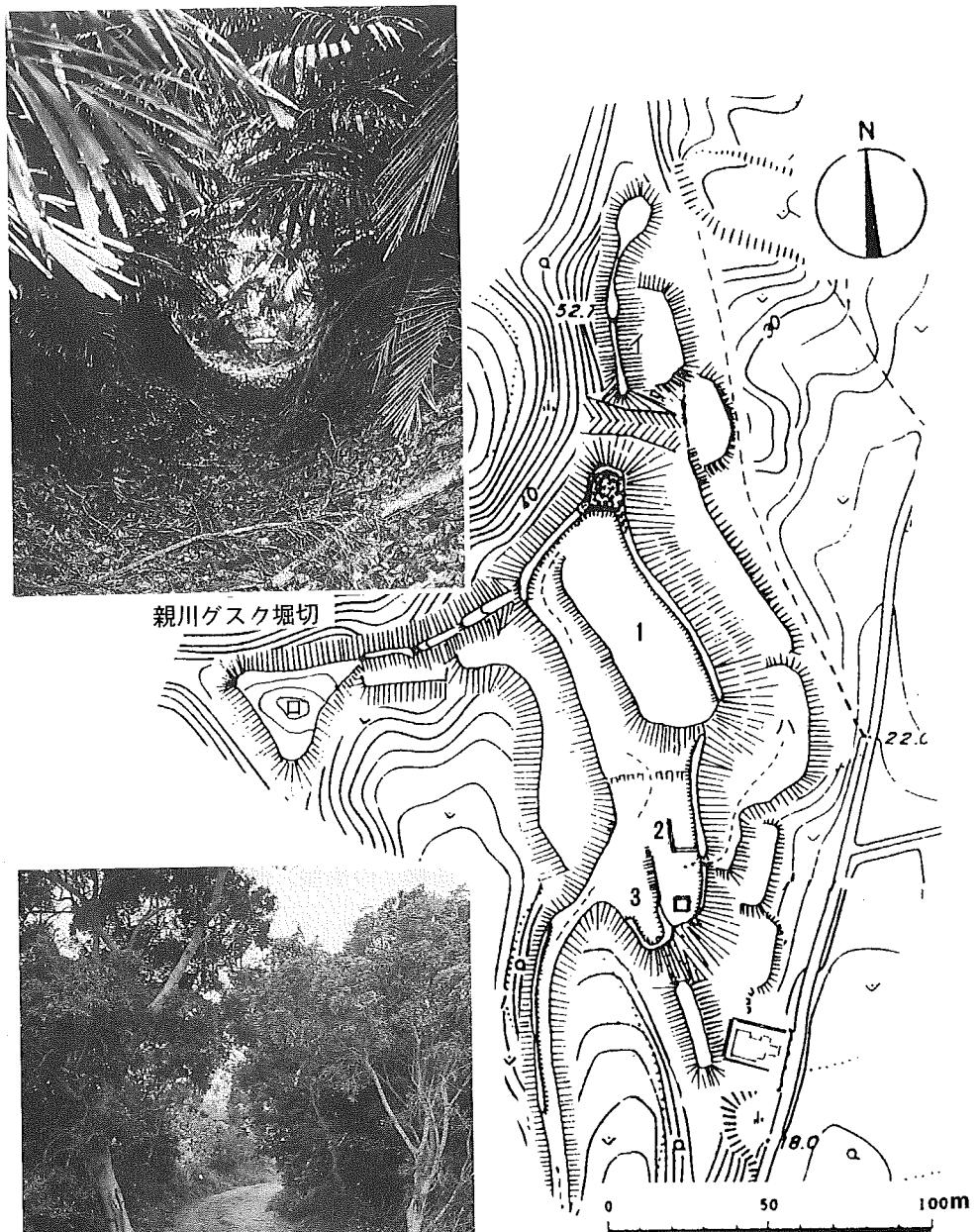
このグスクは、曲輪1を主郭部としている。曲輪1は、50m×18mの規模をもつ長方形状の曲輪で、標高52mの山頂を取り込む形で構築されている。北東側から北北西側にかけては土塁をめぐらし、一段下がって南と西に腰曲輪を設け、さらに尾根つづきの北側には堀切を掘って防御を固めている。この堀切は、主郭である曲輪1から堀底までの高低差が8～9mにも達する堀切である。堀切の平面形状は、砂時計のような形をして中央部が細く、両端の幅が広くなっている。

主郭と腰曲輪との間は切岸になっていて、石垣は全く使われてない。曲輪1の土塁には、直径30cm程の石が多量に混入して一見野面石垣のようにみえるが、基本的には土塁である。このグスクの中には、土塁が曲輪1と、曲輪2の東側、曲輪3の南端部でそれぞれ三箇所確認される。

曲輪1の南下には曲輪2がある。この曲輪は40m×15m規模の南北に細長い曲輪である。曲輪の南端に赤瓦葺きの神アシャギ、北側にはコンクリートでできた祠がある。東側の土塁が途切れるところがあり、そこに虎口が開口し腰曲輪ハに下りていけるようになっているが、この道は、神道と呼ばれていて、昔ノロたちが神アシャギを拝んだ後、ここを下りて大堀切の堀底道を通りグスクの西側の丘にある仲尾の殿まで歩いて行ったという。

曲輪2を一段下がったところに隣接して曲輪3がある。31m×20mの不定形の曲輪であり、現在キビ畑になっている。この曲輪の南には発達した土塁がみられるが、曲輪の全周まわるのでなく、南の突端部から西側にわずかにまわり込んだところまでで終わっている。曲輪の西は鋭い切岸になって下に落ち、城外となる。曲輪3と城外との比高差は20mもある。

虎口は、この曲輪3の南南西の隅に開口しているが単純な平虎口である。大手ルートはそのまま南に蛇行しながら伸びているが、ルートの両側は鋭い切岸になっている。この大手ルートは、曲輪3からU字状に南に曲がってのびているために、大手道を通って入っ



大手ルート

親川ゲスク縄張図

てくる敵に対しては横矢が掛かるようになっている。

曲輪 1 の北側の突端部は細くなっているが、ここに琉球石灰岩塊を盛って構築された櫓台状の遺構がある。その中央に直径 120cm 程の円形状になった井戸跡だといわれる窪みがある。外観上の所見では井戸跡か疑わしく、立地や形状からすると烽火をあげる遺構の可能性もある。

この突出部は、主郭の平坦面より 2m 程高くなっているが、敵襲があったら何時でも石組みをはずして投石用の武器として使えるような積み方になっている。このような遺構は前述したように根謝銘グスク曲輪 6 の南東端と曲輪 7 の北西端でも確認された。

堀切の北には、仲尾の村落に向かう支尾根が派出しているので、この尾根のピーク部にも見張所跡と見られる小平場が構築されている。この平場にいくまでの尾根筋の両側は鋭角に削りおとされていて一人が通れるぐらいの道幅しか確保されてない。小曲輪からは、グスクの東側から北、さらに西側にかけて点在する小集落や耕作地のほか、羽地内海までも手に取るように展望できる。

堀切と小曲輪の中間、やや堀切寄りの尾根筋にはコンクリート製の小さな祠がおかれており。村の人たちは、この一帯の支尾根をヒチグシク（イ）と称している。

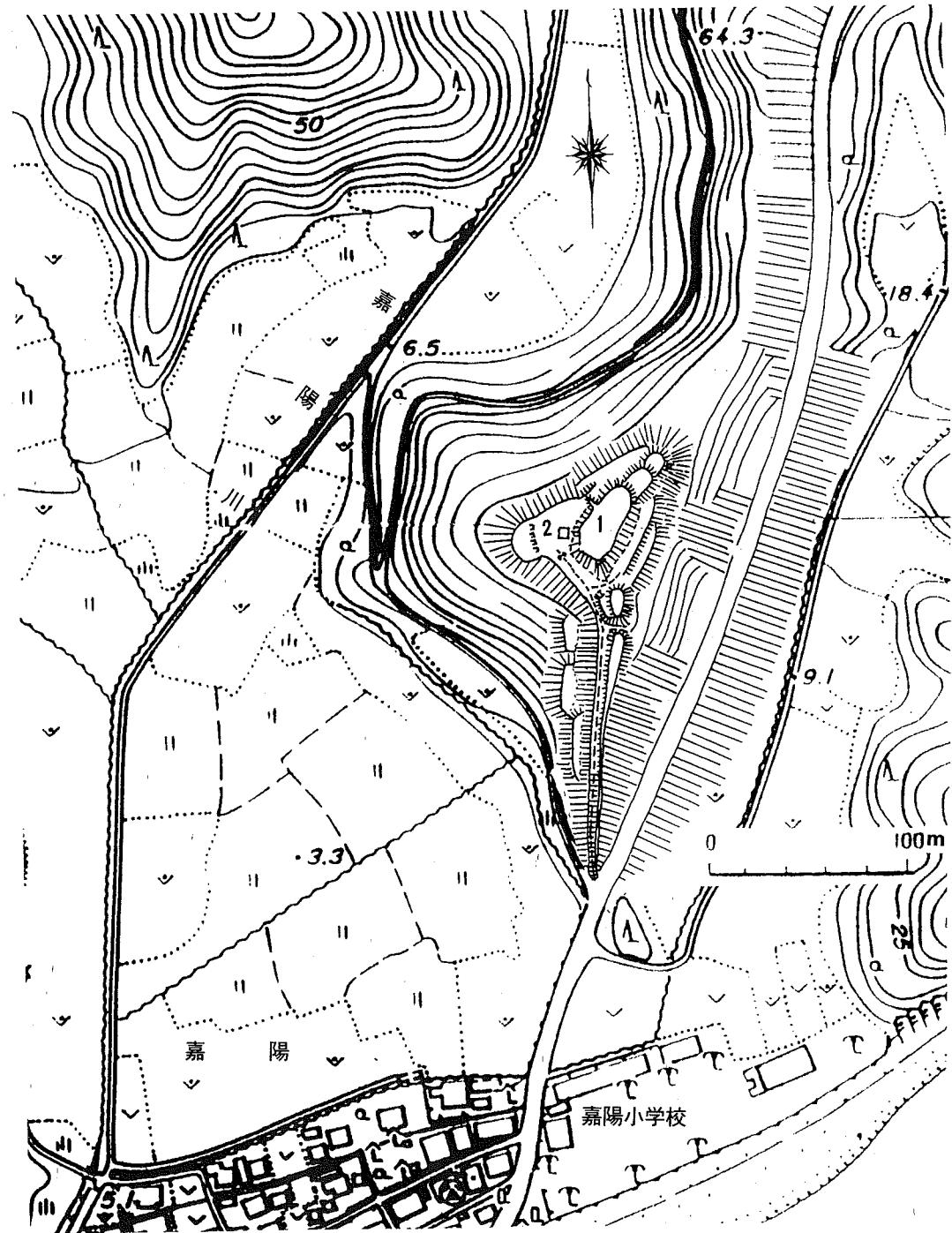
曲輪 1 の西側に派出する支尾根にも腰曲輪や堀切状の防御機能をもつ遺構がいくつか構築されており、標高 47m のピーク部に見張所らしい小平場口が認められる。国土基本図を見るとこのピーク部はさらに二方向に支尾根を派出させているけれども、近年、二方向とも土地改良事業によって削られ現状では、このピーク部から先は平坦な畠地になっている。

近年、圃場整備事業等によって小高い丘や支尾根などが削られたり、マタと呼ばれる小さい谷が埋められるなど地形の改変が急速に進み、旧状がつかみにくくなっている。このグスク周辺も大きく改変を受けた例で、数年前と比べると大変な変貌ぶりである。事実、曲輪 3 の南側にも尾根先がもう少し伸びていたが、そこも削り取られ現在キビ畑になってしまっている。おそらく、こ尾根先にも主郭部を防御する意図で造られた削平地が広がっていたことであろう。

さて、親川グスクは伝承によると未完成のグスクとされている。しかしこれまで見てきたように、いろいろな防御施設を備えたりっぱな城郭であり、この地域では比較的規模の大きいグスクだという認識を我々はもつことができた。城内からは 14~15 世紀に属する貿易陶磁器等も採集されるし、また、グスクの規模や縄張りの構造等からみても周辺の村落を領域支配するための按司の居城だったことが考えられるのである。

嘉陽グスク（名護市嘉陽）

嘉陽グスクは上グスクともいい、嘉陽集落の背後に聳える円錐形の山の上に位置し、国



嘉陽グスク縄張図

頭方東海道の道筋にある。琉球国絵図（元禄国絵図）を見ると、大浦村あたりの一里塚から天仁屋村の一里塚までの間に二つの一里塚がドットで示されており、ここを通る道が首里王府時代に、古道として認識されていたことがわかる。だとすると、嘉陽は東側の南北ルートとしての交通の要衝だったことが考えられる。⁽²⁰⁾ グスクの真下を旧道が南北に通っているので、嘉陽グスクはこの海道筋を睨んで築かれたグスクでもあったわけである。⁽²¹⁾

伝承によると、嘉陽大主（かよううふしゅ）という人が、勝連から移住して築いたグスクだといわれている。その年代は不詳である。

⁽²²⁾ 曲輪1と曲輪2の主郭部と背後の尾根に離段状に続く小曲輪、および大手ルートを抑えるための腰曲輪からなる小規模のグスクである。曲輪1は標高67mのピーク部を取り込んで構築された曲輪で、30m×15m規模である。土壘は確認できない。この曲輪より約3～4m程下がって曲輪2がある。30m×20mの規模を有し、西に向かって舌状に張り出している。曲輪の東側には「紀元二千六百年祭」を記念して建立された本殿・鳥居があり、その前庭部で集落あげての祭祀行事が実施される。本殿の中には、自然石数個が安置されているが、それに混じって丸く調整された直径20cm程の石の球が見られる。この石球は石弾の可能性もある。

主郭部への虎口は単純な平虎口であり、現在そこに鳥居（昭和15年建立）がある。大手ルードの東側には、自然地形がこのルートに沿って残されており、きちんとした曲輪にはなっていないが、そこから側面攻撃が加えられるようになっている。

曲輪1の背後は、削平段が二段になって連なっているために堀切はなくても、この方向の尾根からの進入を防ぐことができる。また、東側には約4m程下がって腰曲輪を設けてある。

この嘉陽グスクは、独立した高い山に築かれたためか、堀切をもたず切岸だけを巧みに使ったグスクである。規模が小さく、単純な曲輪配置になっているが、防御施設などを巧みに配して一応城郭としての体裁を整えているグスクである。

さて、このグスクの特徴とするところを列挙すると次のとおりとなる。

- ①切岸を使って防御されているが、小規模で単純な曲輪配置である。
- ②集落の裏山に位置し、村によってグスクが造られたというイメージが強い。そのことは、築城主体者として伝承されている勝連大主が嘉陽村落の創始者として深い関わりをもっていることとも符号する。
- ③近くには嘉陽村落の耕作地が展開しており、グスクからは耕作地が一望のもとにみわたせる。
- ④グスク全域が御嶽となり、村落民の信仰の対象になっている。
- ⑤旧道をおさえる位置に立地している。



嘉陽グスク曲輪2の虎口には鳥居が建立されている

以上、列挙した特徴点から類推すると、このグスクの築城主体者は、支配者としてはまだ小さい勢力を有する人物、つまり当時の1~2村落を領有するぐらいの長（例えば勝連大主といった伝説上の人物がそれに該当する）が考えられる。嘉陽グスクは、こういう人物が先に立って築いた、いうなれば「村の城」であったのであろう。

幸地グスク（西原町字幸地）

幸地グスクは、熱田子という人物が居城するグスクであったといわれている。グスクの(23)来歴については不明である。

風化の進んだ島尻泥岩の台地を堀切で遮断して独立させたグスクで、標高115mを最高地に、曲輪5の標高100mを最低地とする。1から北に続く尾根筋を堀切によって遮断し、この土をイに盛って土壘を設けることによって堀切の効果を一層高めている。このグスクは、土壘と堀切がある以外、単純な削平地だけで、石垣の城壁は全く見られない。

曲輪1は、26m×20mの規模の不定型の曲輪で、グスクの中で一番広い曲輪である。西端には井戸を標示した拝所がある。曲輪の西側には切岸、その下に曲輪4が構築されている。北側は、堀切によって区画されており、その堀切に面して土壘が認められる。東側は高い切岸があって、その下には、首里と中城をつなぐ旧道口が通っている。旧道は、この曲輪1の真下を通ることになるので、曲輪からは、遠くの通行人まで見通すことが可能(24)。

となる。さらに道を通る敵に側面攻撃も加えることができる。

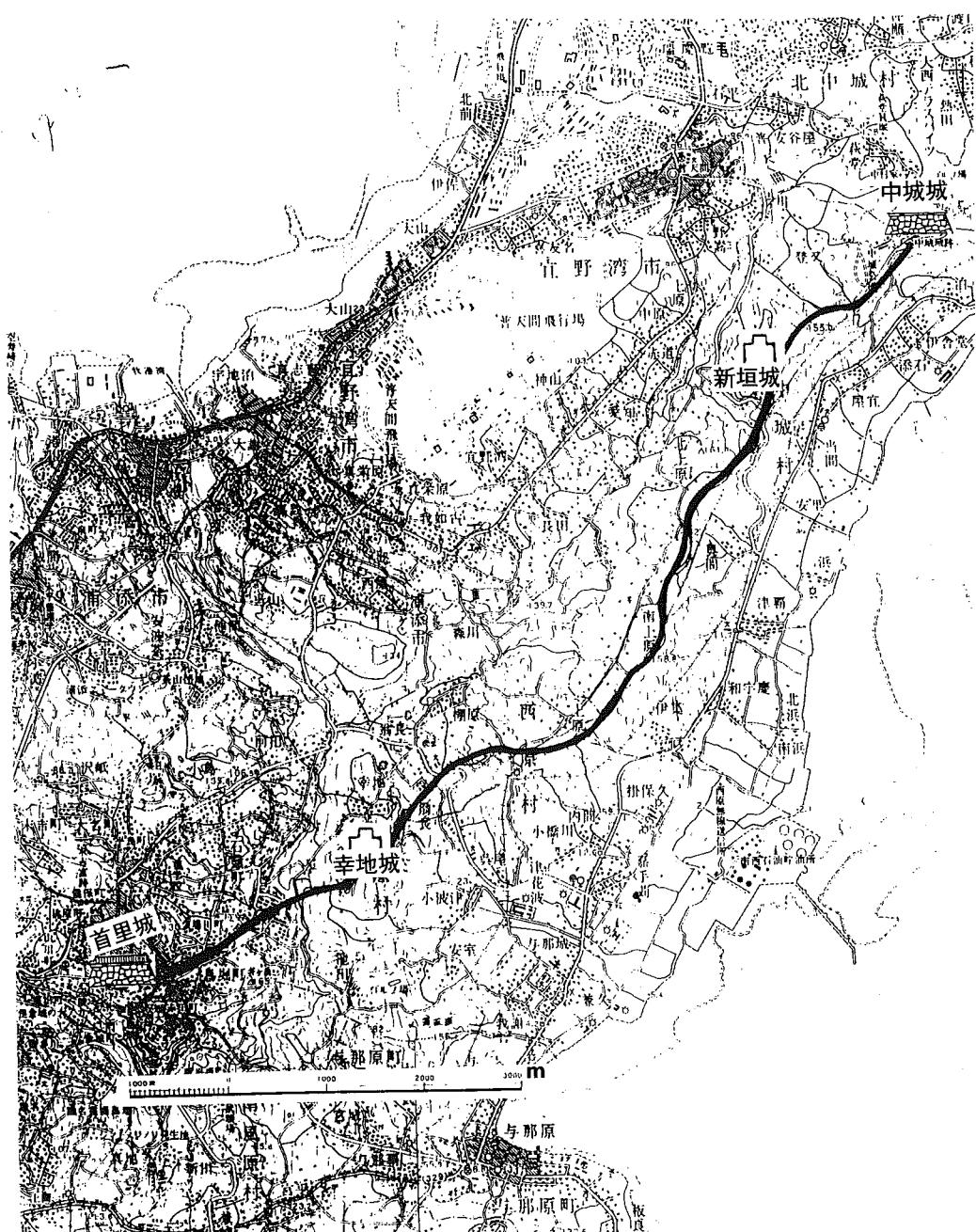


幸地グスク縛張図

曲輪2は、丘のピーク部を取り込み約1坪ほどの平場で、ほとんどが自然地形を残したものである。物見跡か烽火台のように思われる。現在、ここには石灰岩の粗末な祠が置いてあり、線香などが供えられている。ここからの眺望は絶景で、東に中城湾、東西南北四方に西原の各集落が一望のもとに見わたせる。また、足下には、幸地グスクの熱田子と争って滅亡したといわれる津記武太グスクを望むことができる。

主郭の虎口は南に開口しているが、単純な平虎口である。虎口をすすむと大手ルートであるが、このルートには、曲輪2内や曲輪3の腰曲輪から側面攻撃が加えられるようになっている。

ハのところには、旧道の北側から侵入してくる敵が東側に迂回して道路突破ができない



首里城と中城城を結ぶ旧道

よう山尾根を残しながら障壁となる土手を築いている。この土手の先端部には、小さい平場が設けられている。ここに櫓をすれば、敵が道路を迂回することも阻止できるし、下の低地部に開いている道路を封鎖することも可能である。敵襲を警戒するための防御施設としては完璧である。

ホは近世の馬場があったところであるから地形的改変を大きく受けていることが予想される。『球陽』によると、馬場がはじめてひらかれたのは、1695年（尚貞王27）のことだとされている。⁽²⁵⁾ グスク時代よりかなり後代のことである。それ以前、すなわちグスク時代にはここがどういう状況にあったかまったく検討がつかない。現在、100m×30m規模の長方形の平場になっている。この馬場の東南東下方のキビ畑の中に、琉球王府時代の幸地古番所跡がある。⁽²⁶⁾

さて、この幸地グスクは、首里城と中城城を結ぶ交通の要衝に築かれているということで重要な意義がある。⁽²⁷⁾ 1458年中山尚泰久は中部の東側一円で勢力を伸長していた護佐丸や阿摩和利らを滅ぼすことによって琉球の完全支配を握るぎないものにした。護佐丸の娘婿にあたる尚泰久、尚泰久の娘百十踏揚を妻として迎えた阿摩和利、この政略結婚の構図を見ると当時の琉球の国情が浮かび上がってくるのである。通史では語られていないが尚泰久、護佐丸、阿摩和利の間の緊張関係はきっと極度の域に達していたことであろう。三人の覇者たちの力は拮抗し、水面下では鎬をけずる戦いが演じられていたことと思われる。そのため、尚泰久は首里城を固め、護佐丸は中城、阿摩和利は勝連城をそれぞれ固めていたのである。虎口を石造拱門に改修したり、侵入する敵兵を迎撃するために城壁に狭間を設けたり、あるいは城壁を高くしたり、⁽²⁸⁾ 当時の三つの城の緊張の様子はすべてグスクの縄張りに投影されている。⁽²⁹⁾ 幸地グスクは、まさにこの緊迫した時代に、交通の要衝をおさえる目的で首里城の出城として築城された可能性があるのである。

ま　と　め

以上、奄美大島から沖縄本島中部の、とくに石垣のないグスクを中心に述べてきた。これまでわが南西諸島のグスクは、石垣で築かれていることをもってその特徴と考えていたが、グスクの縄張り研究の進展によって、石垣のない土の城も確認できるようになり、けして石垣のグスクだけではないということがわかってきた。とはいえ、やはり土の城の多くは、奄美大島や沖縄本島北部に多く見出され、この地域における築城のあり方の特徴として見ることができるであろう。

さて、これまで、この土の城を中心に縄張り調査の成果を示しつつ防御遺構の把握と整理・分析を試みた。ブッシュをかきわけて実際グスクの中にはいって見ると、いろいろな

ことがわかってくるものである。グスクとはいわれているものの、めぼしい遺構もなく今までただの山だと思われていたものが、防御された削平地を備えていることがわかつたたり、あるいは、近年の工事で開いた掘割だとおもっていたものが、実はりっぱな堀切であり、本稿では、個々のグスクの縄張り調査を通して、グスクがもっている軍事的な要素についてもその重要性を指摘しつつ、そのつど考察を試み記述してきたつもりである。しかし、築城主体者がどういう意図でグスクをつくったのか。また、グスクがどういう役割と機能をもっていたのかについて等々、今後解決していかなければならない課題も数多く存在する。

グスクの縄張り調査を実施してその成果を縄張り図としてまとめることによってグスクを資料化し、築城主体者と地域社会の構造を分析する、このような大きな目標をかかげて筆者がグスク調査の再出発をしたのが8年前のことであった。その間、沖縄の厳しい自然条件下で悪戦苦闘しながらグスクの縄張り調査を実施しているが、作業の方は遅々として進まず、縄張り図として仕上げたグスクもまだ僅かな数である。300近く、グスクを踏査して、その縄張り図を作成していくためには、多くの動力と長い時間を必要とするが、今後も継続していきたいと考えている。

ところで現状では、グスクの縄張り調査に取り組んでいる人は少ない、おそらく皆無に等しいのではないかだろうか。今後多くの人々がグスクに興味もち、縄張り調査を推進していくことができれば、グスク研究も飛躍的に進展するはずである。本稿がそのきっかけにでもなれば幸いである。

なお、石垣のあるグスクについては、今回述べることが出来なかった。別の機会に稿を改めたいと思っている。

註

- (1) 『龍郷町誌－歴史編－』 龍郷町誌歴史編編纂委員会 昭和63年11月。
- (2) 『龍郷町誌－民俗編－』 龍郷町誌民俗編編纂委員会 昭和63年11月。
- (3) 前掲 註(2)
- (4) 前掲 註(2)
- (5) 松本雅明『沖縄の歴史と文化』 近藤出版社 1971年8月。
- (6) 藤木久志「村の城・村の合戦」『朝日百科日本歴史別冊』通巻1号 1993年10月。
- (7) 三木靖 「奄美の歴史 中世－在地領主制の展開として－」『奄美文化誌－南島の歴史と文化』 西日本新聞社 昭和49年10月。
- (8) 前掲 註(7)

- (9) 『国頭村史』国頭村役所 1967年3月。
- (10) 前掲 註(9)
- (11) 宮城長信 「根謝銘城調査概報」『琉大史学』第2号 昭和46年6月。
- (12) 『中山世鑑』 羽地朝秀
- (13) 前掲 註(11)
- (14) 伊是名グスクには標高95mの高い岩山の頂上部にイシカ一という井泉があり、勝連城跡三の曲輪では鍋底状の溜井の遺構が検出されている。
- (15) 前掲 註(11)
- (16) 前掲 註(11)
- (17) 『名護市の遺跡(2)』 名護市教育委員会 1982年3月。
- (18) 新城徳祐 『沖縄の城跡』(株)新報出版 昭和57年8月。
- (19) 1994年1月地元での聞き取りによる。
- (20) 『琉球国絵図史料集第二集－元禄国絵図及び関連史料－』 沖縄県教育委員会 1993年3月。
- (21) こういう交通の要衝に築かれたグスクも数多い。拙稿「歴史の道とグスク」『文化課紀要』第4号沖縄県教育庁文化課 1987年2月を参照。
- (22) 前掲 註(17)
- (23) 嘉手納宗徳編訳『球陽外巻遺老説傳』(角川書店刊、昭和53年)。
- (24) 拙稿 「交通－首里城と中城城をつなぐ道－」『西原町史』第4巻 西原町史編纂委員会 平成元年3月。
- (25) 『球陽』
- (26) 前掲 註(24)
- (27) 前掲 註(24)
- (28) 虎口を石造拱門にした城には中城城や首里城、座喜味城等があるが、勝連城の城門も石造拱門だったといわれている。
- (29) 中城城には、大手の門に1ヵ所、南の曲輪に3ヵ所の狭間が開いている。

「グスクの縄張りについて(上)」64頁13行目の「護衛兵が右手でかかえ先から火を吹いている光景が描写されている。」を次のように訂正する。

「護衛兵が左手で火矢をかかえ右手は耳をふさぎ、火矢の先からは火を吹いている光景が描写されている。」